

電車は規則正しいダイヤのもとに、今朝も変わらずレールの上を走ってゆく。四月ももう後半に差し掛かる頃だ。スーツや真新しい制服を着た人々に混じって、渚は美術予備校へ向かっていた。この春から通うことになった新しい校舎は以前の雑居ビルとは違い、エントランス付きの立派なビルだったが、渚は浮かない気分だった。去年より乗り換えが増え、朝も少し早くなっただけでなく、浪人二年目になってしまった焦りがあった。

1

現役の年に受験ができなかった渚にとって、去年が初めての美大受験だった。私立は補欠の繰上げで何とか合格したものの、芸大は一次落ちという無惨な結果だった。試験課題は苦手な取材系だった。大学構内を自由に歩き回って題材を探し、それをモチーフに絵を描くというものだ。対策も実力も足りていなかったのは明らかだった。受験絵画は傾向の研究と対策を武器に、限られた制作時間の中でいかに強度のある世界を作り上げるかの競争だ。そんな独特のゲームの中とはいえ、絵を描くこと、作ることの中にようやく何かを掴みかけていただけに、このまま諦めることはできず、あと一年だけと親に頭を下げて浪人を継続することにしたのだ。

*

高校三年生の五月、渚は高校に行けなくなった。進路希望調査の紙を出さなくてはいけなかったが、親の期待を先回りするように何かを選択して生きてきた渚には、そこに何を書くのが正解なのか途端に分からなくなってしまった。

テスト期間がもうすぐ始まるという日の夜、机に向かって参考書を開いたものの、蛍光灯のジーというノイズがやけに耳について、感じたことのない苛立ちを覚えた。やがて胸のあたりが苦しくなり、掻きむしりたいような感覚になった。息が詰まって吸えないう。パニックになった。その後どうやって眠ったのか全く思い出せないが、朝起きたらベッドの中で身体が動かなくなっていた。

一日の大半をベッドの中で過ごし、かろうじてコピー用紙に絵を描いては疲れて眠る。登校できたとしても昼ごろで、それでも保健室へ行くのが精一杯だった。進路希望調査の紙は、さすがに保健室までは追いかけてこなかった。教師たちの計らいでたびたび補習を受け、留年は何とか免れた。卒業式の日、全部合わせても二ヶ月程しか一緒に過ごさなかったクラスメイトはまるで他人のようだったし、腫れ物に触るような視線に耐えきれず、書類を受け取るとすぐに帰ってきてしまった。

とりあえず高校は卒業した、でもその先に続くレールは全く見えなかった。そもそも

自分がまだレールの上にいるのかすら分からなかった。

*

そんな忌々しい五月から、ちょうど丸二年が経とうとしていた。ゴールデンウィークが明け、いよいよ本格的に受験対策のカリキュラムが始まる。

校舎のビルのエントランスを入れて階段を登る手前に、小さな給湯室がある。電熱式の小さなコンロと換気扇、スツールが二つあるだけのスペースが、講師たちの喫煙所となっていた。

いつものように三階のアトリエに向かう途中、渚は見知らぬ女性がそこにいるのを見た。長い髪を耳に掛け、少しうつむいて煙草を吸う横顔に思わず目を奪われた。こんな時期に新しい講師かな。話しかけてみようかと思ったが、休み明けでやるべきことが山積みなのを思い出した。黙って横を通り過ぎるとき、換気扇が吸い込みきれなかった煙草の煙がふと香った。

その日の課題は青りんごをひとつ与えられて自由にデッサンするというものだった。渚は鉛筆を削って先を尖らせながら、しばらくりんごの表面を見つめていた。ふと、喫煙所の横顔を思い出す。これまで出会ったことのない、とても綺麗なかたちをしていた。

少しだけ周りを見渡して、課題文をもう一度確かめる。渚はりんごを手に取り、思い切って齧ってみた。何人かがこちらを見ていたが構わず齧り続ける。とうとうりんごは芯の部分だけになってしまった。だんだん茶色に変色していく果肉と、甘いりんごの香り、わずかに残る歯形。凹凸が複雑になったりんごの陰影を、丁寧に観察して画用紙に写しとる。

渚はその日の講評で初めて上段に絵を並べられ、講師に褒められた。

あの日から、渚はたびたびりんごの芯を描くようになった。自分でかたちを作り、一日中まじまじと観察していたりんごの陰影は何よりもリアリティをもって描ける気がした。休日も自分でりんごを買い、齧ってみてはそれを描いたり写真に撮ったりしていた。喫煙所にあの女性の姿がないか探すのも日課になった。どうやら土曜の昼間にだけ出勤しているみたいだった。ということは、教えているのは受験が迫った生徒ではなく、児童か中高生、もしくは趣味のカルチャーコースの大人だ。関わる機会はない。渚は少し落ち込んだ。

*

ある朝、アラームを無意識のうちに止めていて寝坊してしまい、いつもの電車に乗り

遅れてしまった。授業開始に間に合うかギリギリの時間にエントランスに滑り込んだ。

「金髪、似合うね」

ふと振り向くと、喫煙所のあの女性だった。

「お、おはようございます」

「おはよ」

渚は少し動揺していた。駅からここまで走ってきたので息も上がっていた。

「この先生なんですか？」

「あはは、でなきゃただの不審者だよ」

「確かに……」

「基礎科講師の矢野です。よろしくね」

「油画の松島渚です」

「渚ちゃんね。ほら、遅刻しちゃうよ！」

矢野さん、か。

矢野さんが来る土曜日になると、何だかそわそわした。つい職員室や喫煙所に姿を探してしまふ。軽く挨拶をするだけだったが、会えるとそれだけで嬉しかった。

*

夏期講習が始まり、ヌードモデルを招いてのデッサンや、本番の試験を想定した課題などハードな日々が続いていた。世間は夏休み、電車でレジャー施設のキラキラした吊り広告を見るたびに、予備校にこもりきりで薄汚れた服を着た自分とのコントラストのため息をついていた。

「石膏全然似てない、こんなんじや受からないよ」

「人物の等身がおかしいよね、分かってる？」

「何を見せたいのかまるで分からない」

講評中も厳しい言葉が飛び交った。泣き出してしまう生徒も少なくはなかった。一日を終えると爪や手には絵の具がこびりつき、髪や服のどこかから油絵具の臭いがした。

疲れ切って、それでも明日描く絵のことを考えながら帰路につく。美大といえど実技試験だけではない。センター試験の対策もしなければならなかった。一体あとどれくらい走ればいいのだろうか。このルールはどこに繋がっているのだろう。努力をしても報われないことの方が多い、険しいことは分かかっていて選んだ道のはずなのに。頭に浮かぶのは弱音ばかりだった。

渚は耳栓がわりにいつもカナル型のイヤホンを着けていた。RadioheadのThe Bendsを再生する。トム・ヨークの繊細で内省的なヴォーカルと美しいメロディ、感情の起伏のように爆発するギター。弱くて孤独な自分と響き合うような気がして、何度も繰り返した。これを教えてくれた歳上の友人は、去年の試験で落ちた後、五年も続いたという浪人生活に終止符を打った。雑居ビルの校舎の頃、よく非常階段でたむろしていたっけ。そこでよく話していたもう一人の友人は、夏期講習の少し前から予備校に来なくなってしまうていた。その後一度だけ講師と面談しているのを見かけた。髪は伸び、無精髭まで生やしているようだった。背中を丸めて話を聞く姿が何だか弱々しくて、とうとう話しかけられなかった。

*

季節は秋から冬へと移り変わろうとしていた。このところずっと気分が落ち込んでい

て、描くことに集中できない日々が続いていた。二日間で一枚の絵を仕上げる課題で、二日目の今夜は講評がある。構図を決めるのにかなりの時間を使ってしまい、いざ描き始めてもじっくり来ないままだった。今日巻き返すのは難しそうだ。講評で言われるであろう酷評を想像すると、足取りは重かった。

降りるべき駅をわざと乗り過ぎた。このまま、気が済むまで電車に乗っていよう……渚は初めて予備校をサボった。

夏期講習の期間、矢野さんの出勤日は増え、渚はたびたび描いた絵を見せにくくようになっていた。世間話などもするようになり、どうやら土曜日以外の日は、清澄白河の喫茶店でバイトをしているらしかった。

「予備校、サボっちゃいました」

電車の中から矢野さんにメールを送ってみた。

「あらあら。今どこにいるの？喫茶店来るかい？」
すぐに返信が来た。

「行きます！」

清澄白河駅を降りて少し歩いたところに、その喫茶店はあった。重いドアを開けると、コーヒートのいい香りがして、薄暗い店内の奥にエプロンを着けた矢野さんの姿を見つけた。

「いらっしゃい、よく来たね」

案内された角の席に座る。見回すとレトロな雰囲気の内には古い電話やアイロンが飾られていて、柱や壁は黒光りしていた。昔からある建物なのだろうか。メニューを眺めていると、コーヒーだけでもいろんな種類があった。エチオピア・モカ、グアテマラ、マンデリン。初めて聞く名前ばかりで、どれがいいのかわからなかった。渚は一番上にあったブレンドを選ぶ。しばらくすると、コーヒーとモンブランが運ばれてきた。

「ケーキはサービスね」

矢野さんがこっそり耳打ちする。

コーヒーは今まで味わったことのない香りがして、苦いだけでなく酸味や甘味があって美味しかった。ケーキを食べ、しばらく何をすることもなく座っていた。昼時になると客が徐々に増え始めた。渚はクロッキー帳を取り出し、モンブランの載っていた皿と華

奢なフオーク、働く矢野さんや喫茶店の風景をスケッチし始めた。描くのが嫌になっていたわけじゃない、ずっと課題をこなす毎日で、自分が心から描きたいものが何なのか分からなくなっていただけなのだと言った。

「今日は十四時までだから、その後美術館に行かない？」

バイトを終えた矢野さんと一緒に、喫茶店から歩いてすぐの現代美術館へ行った。常設展を見た後、矢野さんは渚を連れて地下の図書コーナーに降りていった。

「ここ、来たことある？」

「図書コーナーは初めて来ました」

「画集見るの面白いよ、好きな画家を見つけてごらん」

渚は画集を一つ一つ書棚から取り出して、表紙を眺めては戻していった。まだ知らない画家がたくさんいる。その中で、一つの画集が目止まった。

節くれた指、上着をはだけた女性の裸体は痩せ細り、肋骨が浮き上がっている……それはエゴン・シーレの全作集だった。

渚はその場にしゃがみこんだままページをめくっていった。震える線、自信の中に垣間見える不安げな表情、大胆な構図、身体がねじれ、不自然にも思えるポーズは、歪んだ自意識と葛藤している人間そのものを、むき出しにしたような絵だった。すごい、こんなふうには絵が描けたら。渚はページをめくるたびに、その画家に強烈に惹かれていった。ここでは本を借りることはできないらしい。職員に尋ねると、コピーサービスというものがあるようだった。特に気に入った絵を三ページコピーして、クロッキー帳に挟んだ。

美術館を出て、二人は木場公園へ向かった。矢野さんはカバンから古そうなカメラを取り出してこう言った。

「渚ちゃん、写真撮ってもいい？」

カメラを向けられるのは正直苦手だった。渚は自分の顔があまり好きではなかった。でも、矢野さんが撮ってくれるならいいかな、と思った。

「いいですよ、ちょっと緊張するけど……」

撮影場所を探す。渚は言われた通りに石の壁の前に立って、言われた通りにカメラのレンズを見つめる。不思議な感じがした。カシャン、と乾いた音がする。フィルムカメラなので、どんなふうに写っているのか分からない。

「日が落ちてきたからギリギリかな」

矢野さんは時々独り言のように喋るほかは、無言でシャッターを切り続けた。

撮影を終え、木場公園を歩きながら、渚は高校生の頃のことをぼつりぼつりと話した。矢野さんは煙草を吸ったり、時々相槌をはさみながらも静かに聞いていた。駅に着くとすっかり暗くなっていた。歩き疲れた二人は、ホームのベンチが空いているのを見つけ、並んで腰掛けた。

「今日はありがとうございました、楽しかったです」

「いえいえ、気晴らしになったみたいで良かったですよ」

「もう少し話していてもいいですか？」

「いいよ、話そう」

電車がホームに滑り込む、ドアが開いて、何人が降り、並んでいた何人が乗り込む。ドアが閉まり、電車は再び走り出す。それを何回繰り返したのだろうか。数えきれぬほどの電車の往来にレールの表面は磨かれて、ホームの蛍光灯の光を冷たく反射していた。冷たくて硬いベンチと、時々吹き込む風に身体が冷えてきた。しばらく沈黙が続いた。

「あの……」

渚は言いかけた言葉を飲み込んだ。

矢野さんはしばらく黙って渚を見ていたが、やがて立ち上がると

「さ、冷えてきたしそろそろ帰ろう」

そう言って渚の背中を軽く叩いた。

ちょうど予備校が終わった頃で、何事もなく帰れそうな時間だった。帰り道はずっと、喫茶店のスケッチとコピーしたエゴン・シーレの絵を眺めながら、矢野さんとの会話を思い出していた。

*

目が覚めた時の静けさと、曇りガラス越しに感じる眩しさで、外を見る前に何となく雪の予感がするのは不思議だ。前日から関東にも大雪の予報が出ていたが、起きたら本当に雪景色だった。成人式にはだいたい前から行かないつもりだったので、いつも通り予備校へ向かう。

慣れない雪にダイヤはかなり乱れていて、寒さに凍えながらホームで電車を待つ。しばらく来なそうなので、クロッキー帳を取り出してスケッチをすることにした。駅前のロータリーに停まったタクシーから、振袖の女の子が降りてきた。雪景色の成人式なんて、一生忘れない思い出になるんだろうな。渚はどこか他人事のような気持ちでそれを見ていた。中学の同級生たちは今頃どうしているんだろうか。携帯が壊れて、連絡先はほとんど消えてしまっていたが、それを取り戻すことはしなかった。そんなことを考えながら線を引きは迷い、描きあぐねているうちに電車が来た。

予備校に着くと同じ年のクラスメイトは渚しか登校しておらず、あとは皆この雪の中を成人式に行ったらしかった。雪は日中も降ったりやんだりを繰り返して、これからまた電車が止まる可能性もあるとの事だった。帰宅困難者を出すわけにはいかないと、講師の一言で授業は午前中で終わりになった。片付けを終えてエントランスに降りてくると、矢野さんが手まねきしている。

「ちょっと時間ある？こっち来て」

誰もいない基礎料の教室に入ると、床にモノクロの写真がたくさん並べてあった。予備校をサボった日、木場公園で撮ってもらった写真だった。

「自分って、こんな顔をしているんだ。」

いつからか人の目も、鏡に映る自分の目すらも真っ直ぐに見ることができなくなっていた渚は、そこにあるのがまるで自分ではないような感覚になって、しばらく無言で写真を見つめていた。

「どう？いい感じでしょ」

「こんなふうに撮ってもらったのって初めてで、なんていうか、悪くないなって……」
「あはは、ならよかったよ」

写真を一枚手に取ってみると、厚みのある印画紙が少し波打っていた。矢野さんが暗室で自ら現像したのだという。

「今いろんな人のポートレートを撮っていてね、来年写真展をやるんだ。渚ちゃんの写真もそこに展示していいかな」

自分の写真が作品となり、誰かに見られることを想像すると、なんだか照れくさいような不思議な気持ちだった。でも、嬉しかった。渚はもちろんです、と答えた。

「写真はね、ものではなくて光を写しているんだよ。だから光がないと写せないの」

帰り際に矢野さんが言った言葉が、雪道を歩く渚の頭の中にずっと残っていた。

*

私立の入試は概ね予想通りの課題だった。静物デッサンと静物の油絵。二年目にもなると余裕が出てきて、前乗りで宿泊したビジネスホテルの周りを予備校の友人たちと散策したりもした。そして今年は練習ではなく、正式な合格だった。ひとまず安心だ。

そして迎えた芸大の試験当日。絵画棟と呼ばれる八階建ての建物に、千人を超える受

受験生が集まる。受験番号ごとに各階の部屋に入っていくが、エレベーターはもちろん使えないので、重い画材を背負って階段を登っていく。出願が早ければ若い番号になり、階段をたくさん登らなくて済む。渚は五階まで登った。しばらく廊下に並び、点呼がある。ようやく試験会場のアトリエに入れるのは、集合から一時間後のことだ。受験番号が割り当てられた席に座り、課題の発表を待つ。どんな出題だろうか、モデル台がないから、静物ではなさそうだ。荷物を置き、イーゼルの前に座る。鐘を持った人がそれを鳴らしながら廊下を走るのが、試験開始の合図だ。

『一次試験…自画像を描きなさい』

配られた鏡を覗き込む。自分の顔が映る。それを見つめる渚の目は、もう怯えてはいなかった。前日からあらかじめ削って尖らせておいた鉛筆と木炭を、足元に並べる。構図はすぐに決まった。ふっと息をついてから、迷うことなく線を引いていった。

一次試験で、受験生の約半分がふるいにかけられる。渚は一瞬、去年の悔しい結果を思い出した。でも、去年の自分とはもう別人だ。今日までやるべき事はやってきたつもりだ。

そして一次試験の結果を待たずにすぐに二次試験対策の日々が始まる。あらゆる出題

を想定しては、これまでの講評ノートを見返していた。講評ノートの中の渚は、時につまづきながらもひとつずつ確実に、自分の表現を見つけ出していた。

一次は無事に突破し、いよいよ未知の二次試験が始まった。五百人に減った受験生が、再び絵画棟の階段を登っていく。二次試験は合計三日間に及ぶ。一日目のデッサンの課題は、『あなたの食べたい物を描きなさい』だった。渚は、かじりかけのりんごを描いた。

油絵の課題は渚の得意とするヌードモデルを描くというシンプルなものだった。渚はくじで引いたモデルの正面の席に着く。斜めに差し込む朝の光がモデルに当たっていて、とても美しかった。その光の印象を素直に捉えて描きたい。光の向きが変わらないうちに、大まかな陰影を描き、細部はまた明日の午前中の光のもとに詰めていくことにした。肌の下地に大胆にグリーンを置き、上から半透明の層を重ねることで、血管の透けて見えるような本物の皮膚の質感を描いた。時々席を立て、離れたところから自分の絵を見る。

いい絵だ。渚は残り時間も、それが試験であることも、もはや気にならなくなっていた。自分が今描いているもの、目の前にある美しい瞬間は自分だけのものだと思った。その思いは、試験終了のベルが鳴り、絵筆をイーゼルに置いたあとも変わることはなかった。

*

合格発表を待つ間の二週間ほどは、久しぶりに遊びに出かけたりした。数年ぶりのディズニールランドや動物園。こんなに晴れやかな気持ちはいつぶりだろうか。

合格発表の当日、渚はバスの時刻表を勘違いしてしまい、大学正門の掲示板にて行われる合格発表の掲示時刻には間に合いそうになかった。そわそわする気持ちを抑えつつ、ホームのベンチで電車を待っていた。講師陣は掲示時刻の前に待機していて、いち早く自らの生徒の可否を確認し、合格速報を出すのが常だった。時計を見る、今ごろもう番号が張り出されている頃だろうか。

その時携帯が震え、ポケットから取り出すと矢野さんからだった。

「今日までよく頑張ってきたね。」

……」

メッセージの先は、開いてみないと読めない。もしかして、と思ったが、渚は携帯を

そのままポケットにしまった。結果は自分の目で確かめてみたい。ちょうどホームに滑り込んできた電車に乗ると、土曜日らしく親子連れもちらほら乗車していた。ベビーカーの子供と目があって、渚の気持ちは柔らかく緩んだ。

閉まったドアにもたれて、外に目をやる。春の日差しを反射して、レールはずっと先まで続いていた。